沖代地区条里跡
福島遺跡東入垣地区

1995年度　中津地区遺跡群発掘調査概報(VIII)
中津市文化財調査報告　第17集

1996

中津市教育委員会

例　言

一、本書は中津市教育委員会が1995年度に実施した中津地区遺跡群発掘調査事業の調査概報である。

一、調査は1995年度国宝重要文化財等保存整備事業費及び1995年度大分県文化財保存事業費の補助を受けて実施した。

一、調査団の構成は下記のとおりである。

一、調査主体　中津市教育委員会

調査責任者　髙椋　忠隆（中津市教育委員会教育長）

調査指導　山中　敏史（奈良国立文化財研究所集落遺跡研究室長）
賀川　光夫（別府大学教授）
小田富士雄（福岡大学教授）
後藤　宗俊（別府大学教授）
甲斐　忠彦（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館学芸課長）
真野　和夫（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館調査課長）

調査事務　麻川　尚良（中津市教育委員会市民文化センター館長）
田中布由彦（中津市教育委員会市民文化センター文化財係係長）
佐藤　輝正（中津市教育委員会市民文化センター文化財係主査）
富田　修司（中津市教育委員会市民文化センター文化財係主任）

調査担当　高崎　章子（中津市教育委員会市民文化センター文化財係主任）
花崎　　徹（中津市教育委員会市民文化センター文化財係技師）

調査員　清水　宗昭（大分県教育庁文化課主幹）
宮内　克己（大分県教育庁文化課主査）
村上　久和（大分県教育庁文化課主査）

上記の他、小柳和宏氏（大分県教育庁文化課主任）より有益なご助言、ご指導を頂いた。記して謝意を表する。

一、遺物整理は秋吉三和子（中津市歴史民俗資料館）が行った。

一、遺構、遺物の実測、トレース、写真撮影は高崎、花崎が行った。

一、本書の執筆は高崎、花崎が分担して行い、文責を末尾に記した。

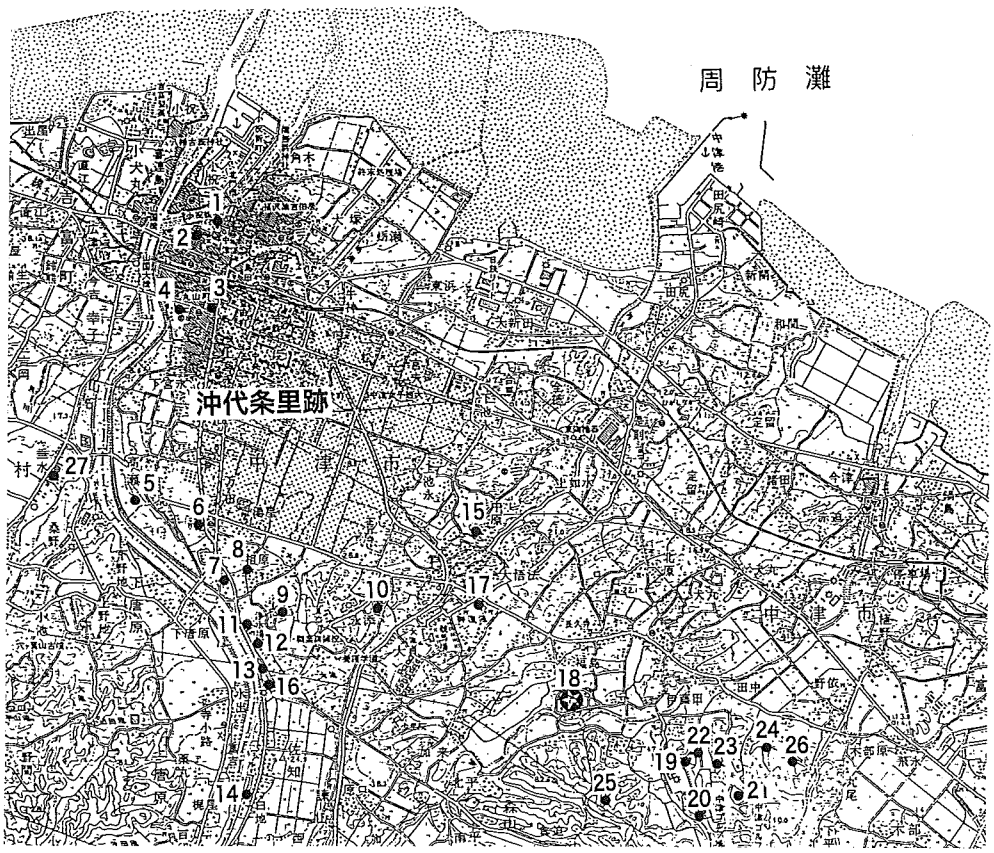
一、編集は高崎が行った。

一、現場作業は以下の皆さんの協力による。

神崎文子、徳永賀子、黒川みゆき、黒川洋美、田原文子、中　和代、湯口ヒロ子、小倉真理、黒土　勉、山縣信夫、草野郁雄、植山京子、今永キク子、植山トミ子、植山松枝、植山ヨシカ、辛島雅美、辻原　霞、寺内勝美、長岡久美子

目　次

第１章　地理と歴史的環境……1
第２章　沖代地区条里跡
　１．条里の概要と調査に至る経緯……2
　２．調査の概要
　　（１）小倉地区……3
　　（２）高田地区……3
　　（３）市木地区……4
　　（４）まとめ……6
第３章　福島遺跡東入垣地区
　１．調査に至る経緯……7
　２．調査の概要……7
　　（１）弥生時代……8
　　（２）古墳時代……１０
　　（３）奈良、平安時代……１１
　　（４）まとめ……１２



1. 中津城跡
2. 幡校進脩館跡
3. 豊田小学校遺跡
4. 高畑遺跡
5. 高瀬遺跡
6. 上万田遺跡
7. 三口遺跡
8. 相原廃寺
9. 相原山首遺跡
10. 長者屋敷遺跡
11. 坂手前横穴
12. 相原古墳
13. 弊旗邸古墳
14. 佐知遺跡
15. 中原遺跡
16. 上の原横穴
17. 薦神社
18. 棒垣遺跡
19. 草場窯支群
20. 大谷窯支群
21. ホヤ池窯支群
22. 夜鳴池窯支群
23. 踊ヶ迫窯支群
24. 大池窯支群
25. 洞ノ上窯支群
26. 瓦ヶ迫窯支群
27. 垂水廃寺

第１図　中津地方主要遺跡分布図

第１章　地理と歴史的環境

大分県の北部、周防灘に面する中津市は、山国川を狭み福岡県と接しており、人口約６８,０００人、市域55.67 km²を有する県北の中核都市である。山国川は英彦山に源を発し金吉川、津民川など19の支流を集め、下流域に広がる沖代平野へ与える恩恵は計り知れないものがある。また八面山からのびる舌状台地を中心とした洪積台地、通称下毛原台地が東側に広がる。

ここで中津市の主要遺跡を概観してみる。旧石器時代の遺跡は、近年断片的に発見され、後期旧石器時代に属する。縄文時代の遺跡は洪積台地にほとんどが分布し、棒垣遺跡、高畑遺跡などが代表される。弥生時代の遺跡は前期から中期に主として台地上に形成され、後期には山国川に沿う自然堤防上にひろがる。また古墳時代も弥生時代と遺跡分布域を同じくして立地する。墓地は台地上に分布し、近年発掘調査された相原山首遺跡、弊旗邸古墳などがしられる。市の東南部には県下最大級の野依、伊藤田窯跡群が立地する。昨年当窯跡群のホヤ池窯跡で、８基の窯跡を確認した。７世紀初頭から８世紀にかけて土器、瓦を産出していたと思われる。７世紀以降沖代平野には条里制がしかれ現代に至るまでの景観がうかがえる。また、今年度古代官道の勅使街道より３００ｍほど南側で、大型の掘立柱建物が発掘された。建物は倉庫群で、下毛郡衙の正倉ではないかと思われる。(花崎)

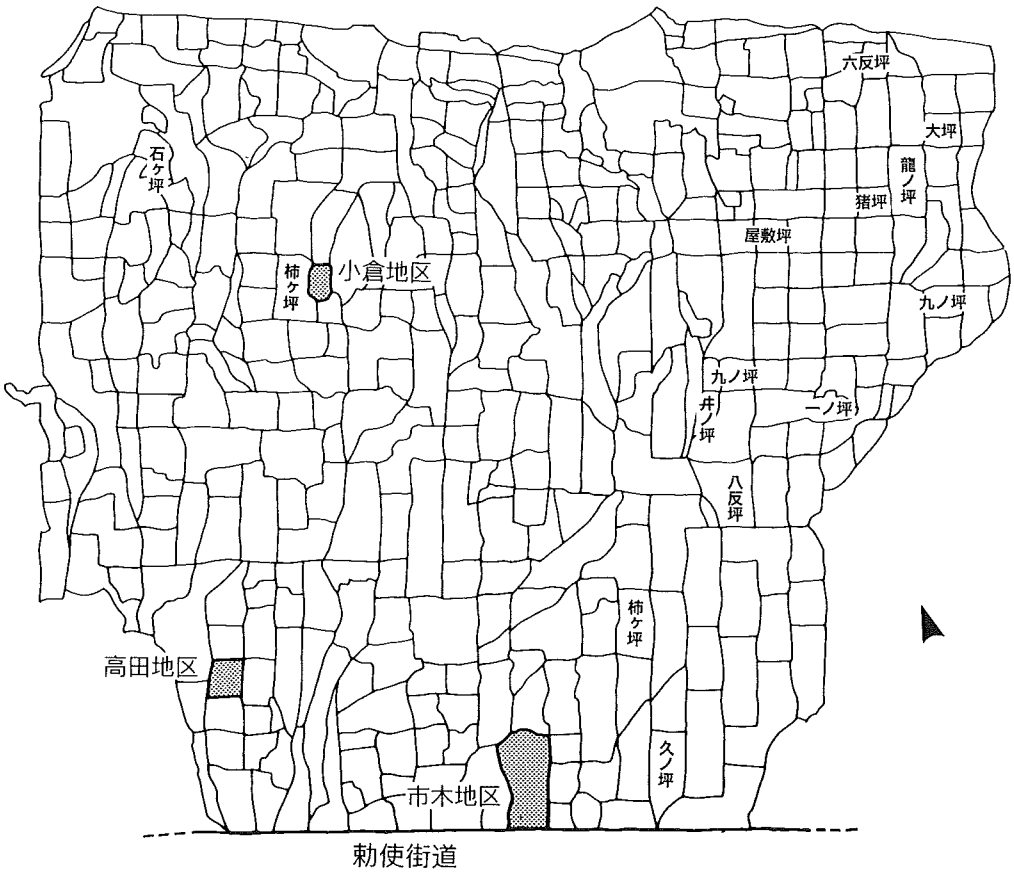
第２章　沖代地区条里跡

１．条里の概要と調査に至る経緯

沖代平野は、山国川の氾濫による礫石土砂がつくりだした沖積平野で、中津市の西半分をしめる。古代より条里制がしかれ、中津の人々の米倉として現在に至っている。県内の条里遺構は、大分平野、国東半島の谷あい、宇佐平野、安心院盆地、日田盆地などに分布しているが、沖代条里はその中でも最大規模である。近年の開発により、条里の地割はくずれつつある。遺構の範囲は北は日豊線沿いから南は勅使街道までの約2.6キロ、東西約３キロで、阡線は東に約20度傾く。坪内の地割は長地形が多く認められる。

条里遺跡周辺の字図をみると(第２図)、条里の地割は南部と東部に比較的よく残っている。このあたりは現在でも水田が方形につらなる様子が見られる。北部は市内の中心部分で、開発が早くから進んでいることから、現地表面で条里の原形をたどることは難しい。また西部の字界線のみだれは、山国川に近く、川の氾濫と開発がくりかえされた結果であろう。現在残る地名で坪付き地名をひろっていくと、大坪、六反坪、九ノ坪(２つ)、一ノ坪、井ノ坪、八反坪、久ノ坪、柿ヶ坪（２つ)、猪坪、龍ノ坪、屋敷坪、石ヶ坪などがある。やはり南部と東部によく残っている。

さて、中津市では開発により条里遺構が年々消えていく現状に対処するため、今年度より国庫補助をうけ、遺跡の確認調査を実施することにした。条里遺構の検出につとめ、条里景観復原の基礎資料を得るためのものである。調査対象は条里遺跡内での開発予定地区である。今年度は小倉地区(945㎡)、高田地区（3,605 ㎡)、市木地区（6,925 ㎡）の３ヵ所で行った。(高崎)

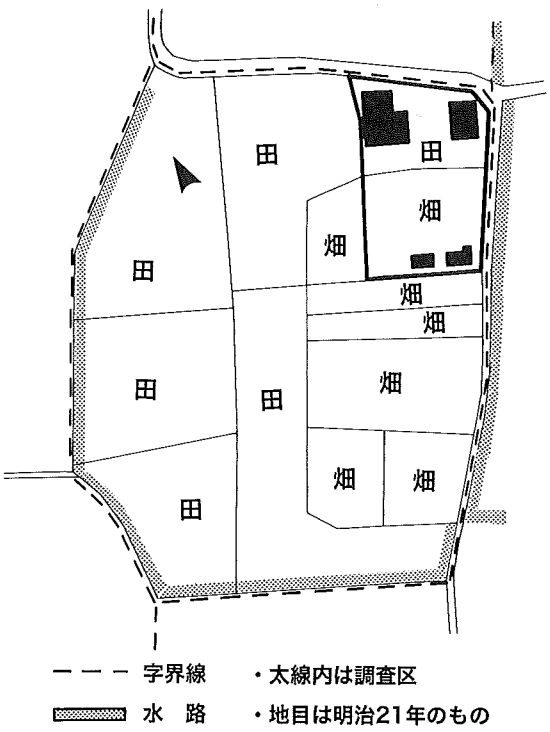


第２図　沖代条里内の字界線　（S＝1/24000）

2．調査の概要

（1）小倉地区

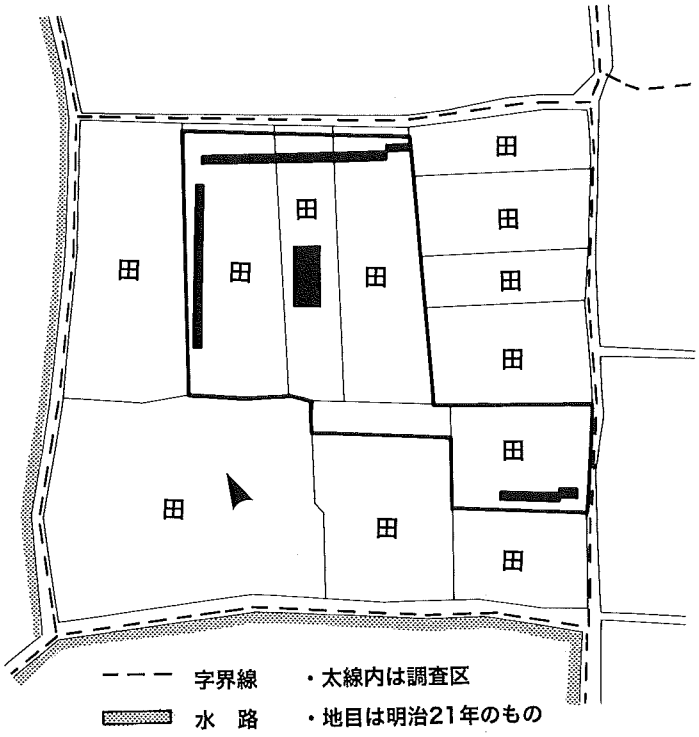
同地区は沖代条里遺跡内のやや西よりに位置し、周辺は開発が進んでいる。調査区は戦前から昭和３５年まで火葬場があった場所で、その後児童相談所に建て替えられていた。建物の老朽化に伴い、児童相談所は現在近くに移転しており、新しく体育館を建設するための事前調査を実施することになった。調査はまず南側に２ヵ所トレンチを設定したところ、固く乾燥した黄褐色の地山に数個の柱穴を検出した。柱穴からは、土師器小片が出土し、土層断面に柱の痕跡が認められた。しかし、旧児童相談所や旧火葬場の建物基礎が地山面まで到達しており、トレンチの拡張が困難であったため、反対側の北側を重機により２ヵ所ほり広げたところ、一転して灰褐色の泥土があらわれた。攪乱が著しく、遺構及び遺物の検出はならず、これ以上の発掘の必要はないと判断した。明治21年の字図によると、小倉地区内の東部分に、水田に囲まれて畑地の一角がみえる。調査区の北側は水田に、南側は畑地にあたる。条里内でも水田化していなかった場所と思われる。（高崎）



第３図　小倉地区全体図（S＝1/1500）

（2）高田地区

同地区は沖代条里の西端に位置し、正方形の条里地割の水田を今に残している。今回、民間の宅地開発に伴い、試掘調査を実施した。調査は重機による掘削とし、東西方向、南北方向２本ずつのトレンチを設定した。現代の耕作土、床土を除去すると、表土より約50cm下で、約30cmの厚さの黒灰色土層に到達した。これは旧耕作土であると思われ、調査区全域をおおっていた。その下には地山である黄色粘土層があり、所々畦のような盛り上がりや、溝がほりこまれている様が確認できた。黄色粘土層は含水性が高く、常に水がしみでる状態であった。しかし土壌断面では、酸化鉄の集積は認められなかった。また、遺物も採取できず、条里遺構は認識できなかった。工事は全体を１ｍほど盛り土をして行い、黒灰色土層面が破壊されることはないことから、調査を中断した。（高崎）



第４図　高田地区全体図（S＝1/1500）

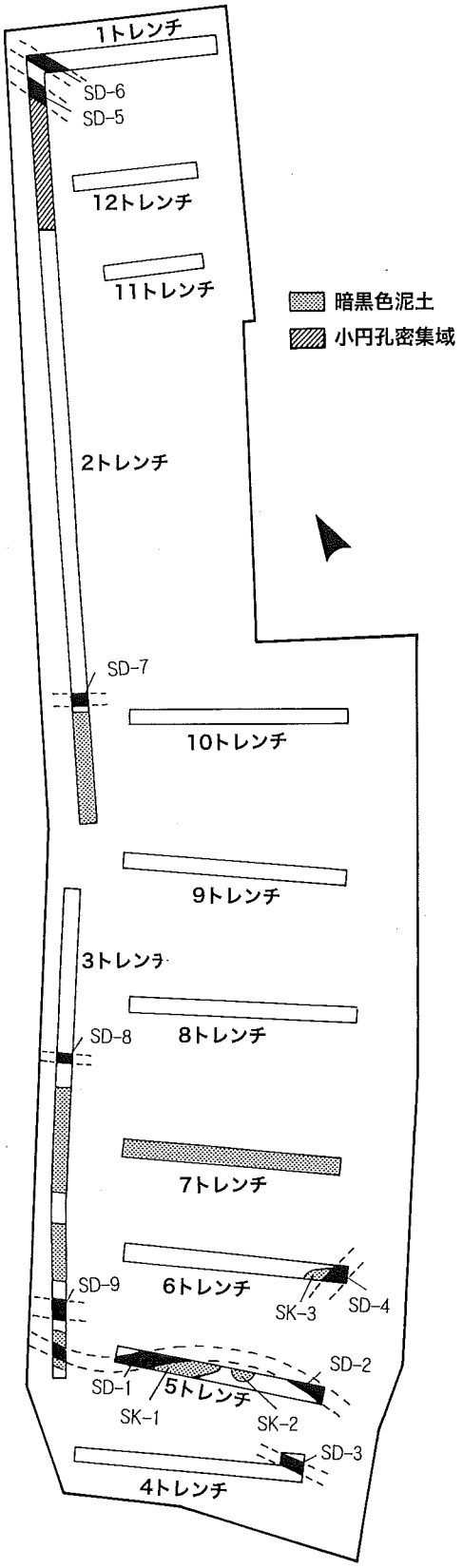
（3）市木地区

沖代条里の南端、勅使街道沿いに位置する。民間の宅地開発に伴い、試掘調査を実施した。現地は休耕田で丈の高い草が生い茂っていた。また非常に地下水位の高い強湿地で、重機による掘削は難航した。12本のトレンチを設定したが、８～12トレンチは地盤のゆるさから思うように観察できなかった。工事は盛り土をし、遺構面に影響がないことから、調査を終了した。

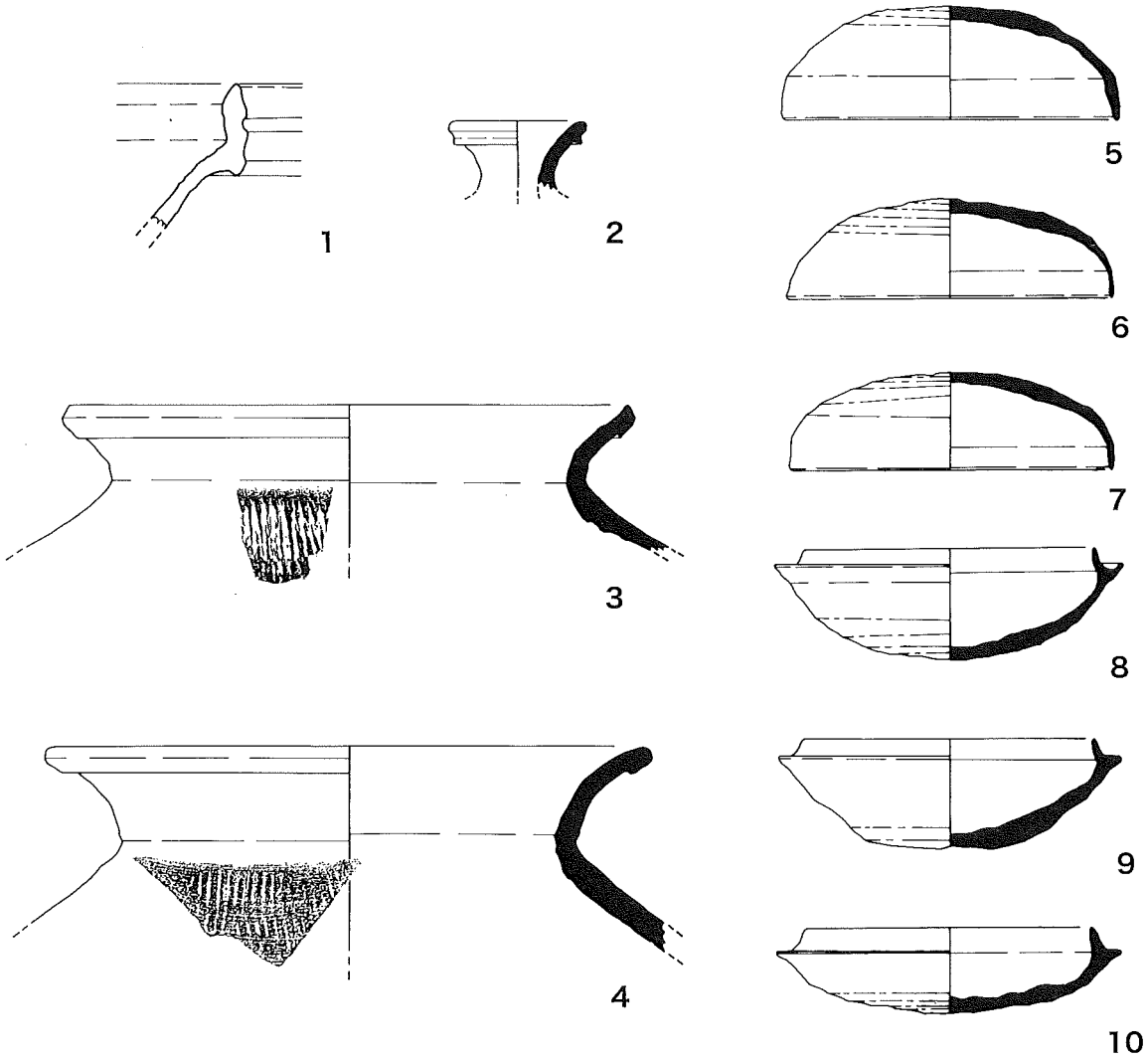
土層　表土である耕作土を除去すると、褐色土の旧水田面が３～４層あり、各土層の間には酸化鉄の集積が確認できた。また最下層は柔らかい青白色粘土層で、数本の深さ約40~60 cmの溝が掘りこまれていた。溝（ＳＤ－１～９）には暗黒色泥土が堆積しており、溝沿い（ＳＫ－１～３）、及び２トレ、３トレ、７トレの広い範囲でも、この土の堆積が認められた。

遺物　旧水田面からは、三層より18世紀後半の磁器片、二層と三層の間からは16世紀の備前系すり鉢口縁部（第６図の１）、また地山直上からは格子目タタキの瓦小片とともに瓦質土器が出土した。溝、及び暗黒色泥土出土土器の器種構成は、須恵器の坏身28点、坏蓋16点、甕は小片を含むと27点で、提瓶の口頸部が１点ある（第６図２～10）。他に弥生時代後期の高坏口縁部などの破片も出土している。

２は提瓶の口頸部である。ＳＫ－３出土。３、４は須恵器甕の口頸部。３の口縁部は短くまっすぐ外に開き、端部に厚みをもたせる。４は外に湾曲しながらひらく。３、４とも胴部内面に同心円紋、外面に平行タタキをほどこす。共にＳＤ－２出土。５、６、７のの須恵器坏蓋はいずれも天井部をヘラケズリし、口縁部内側に浅い段を有す。５は３トレンチ暗黒色泥土出土のほぼ完形品で、他の２つより深く、口縁部は肥厚する。口径は13.8cm。６はＳＫ－３、７はＳＤ－４というほぼ同じ場所から出土しており、口径も13.1~13.2 cm，口縁端部を薄く仕上げる点でも共通している。ＳＫ－３出土の坏身８は灰白色で、内底部を指で右回りに円を描くように何度もなで、胎土は精良で、大変ていねいなつくりである。これ



第５図　市木地区遺構配置図（Ｓ＝１/800）



第６図　市木地区出土遺物実測図（S＝1/3）

は坏蓋６と色調、調整とも似通っており、同一工人の手によるものであろう。またＳＤ－４出土の９は７とセット関係になると思われる。10は７トレンチ暗黒色泥土出土で、８、９とくらべると平低である。これらの坏はその形態から６世紀後半に比定できる。

以上より、市木地区の遺構について検討する。ＳＤ－１とＳＤ－２から出土した土器が接合したことから、図５で表したように２つの溝をつながっているとすると、東西方向に蛇行した溝になる。これらの溝は水田に伴う水路であり、暗黒色泥土は古墳時代の水田の耕作土であろう。東西では土地の高低差はほとんどなかったが、南北方向では明らかに北が低くなっていた。田の用水は現代と同じく、南から北へ流れていたのである。また、ＳＤ－４、ＳＫ－３からはまとまった状態で須恵器の坏身、坏蓋が出土した。依存状態もよく、意識してこの場所に置かれたものと思われる。なんらかの水田にともなう祭祀の存在を考える必要があろう。一方、ＳＤ－５の南側には床面に直径５㎝前後の小円孔が密集していた(図５の斜線部分)。稲の株跡ではないかと思われたが、残念ながら、今回は確認しえなかった。さて、条里遺構であるが、床面直上で近世の瓦質土器が出土しており、この地区においては古代、中世の条里水田面は後世の耕作により削平され、土層断面に小畦畔は認められなかった。(高崎)

（4）まとめ

今回の小倉、高田、市木の３地区の調査では、条里地割に直接関わる資料はえられなかったが、現在の地表面ではわからない多くの情報を得ることができた。市木地区では、古墳時代の水田遺構の存在がわかり、条里施行以前から水田として開発されていたことがわかった。小倉地区では、これから条里遺構の調査をする上で、水田遺構だけでなく、水田開発されていないこのような微高地にも注目する必要があることが改めて認識できた。今後は発掘に並行して、地形、水利、字図などの検討を重ねる必要がある。条里施行以前、いつから、どの範囲まで水田開発が行われていたのか。条里施行の開始時期は、そして完了する時期はいつか。条里内の水田開発されていない場所はどこにあり、どう利用されてきたか。などの点をおさえ、条里遺跡内の古景観の復原を目指したい。（高崎）

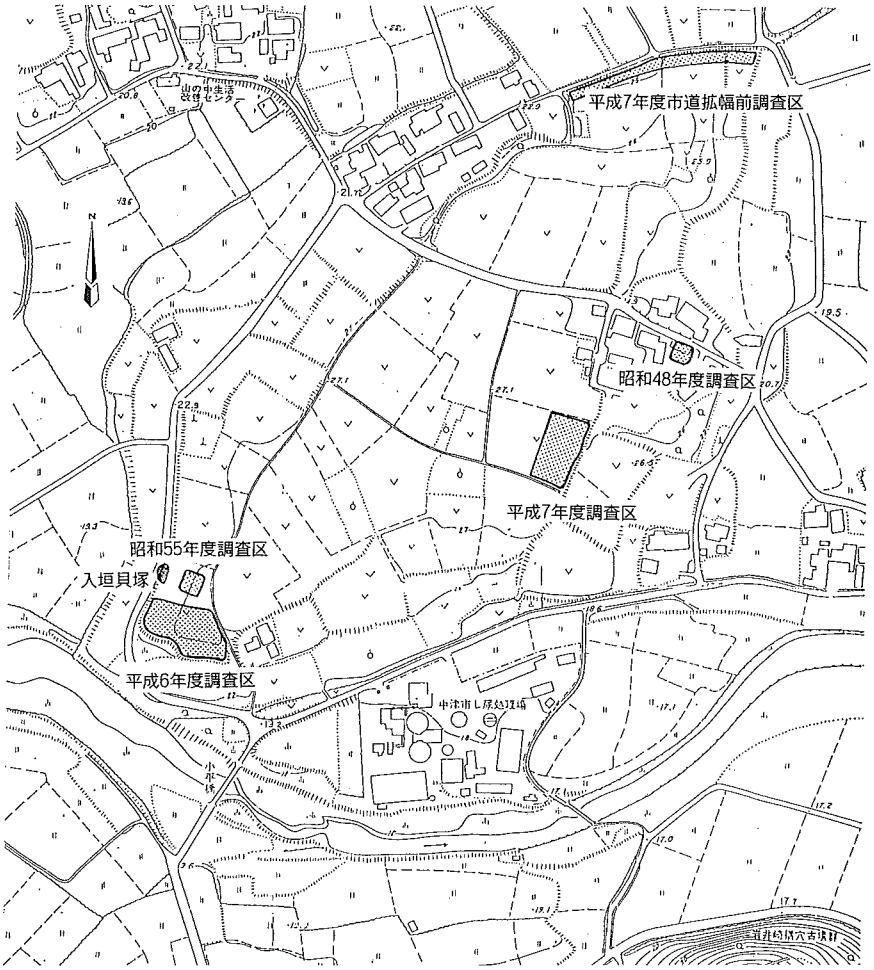
［参考文献］

大分県教育委員会『大分県史古代編』1982

中津市史刊行会『中津市史』1965

八賀　晋「田染、上野の水田開発と条里制」『大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　研究紀要４』1987

第３章　福島遺跡東入垣地区

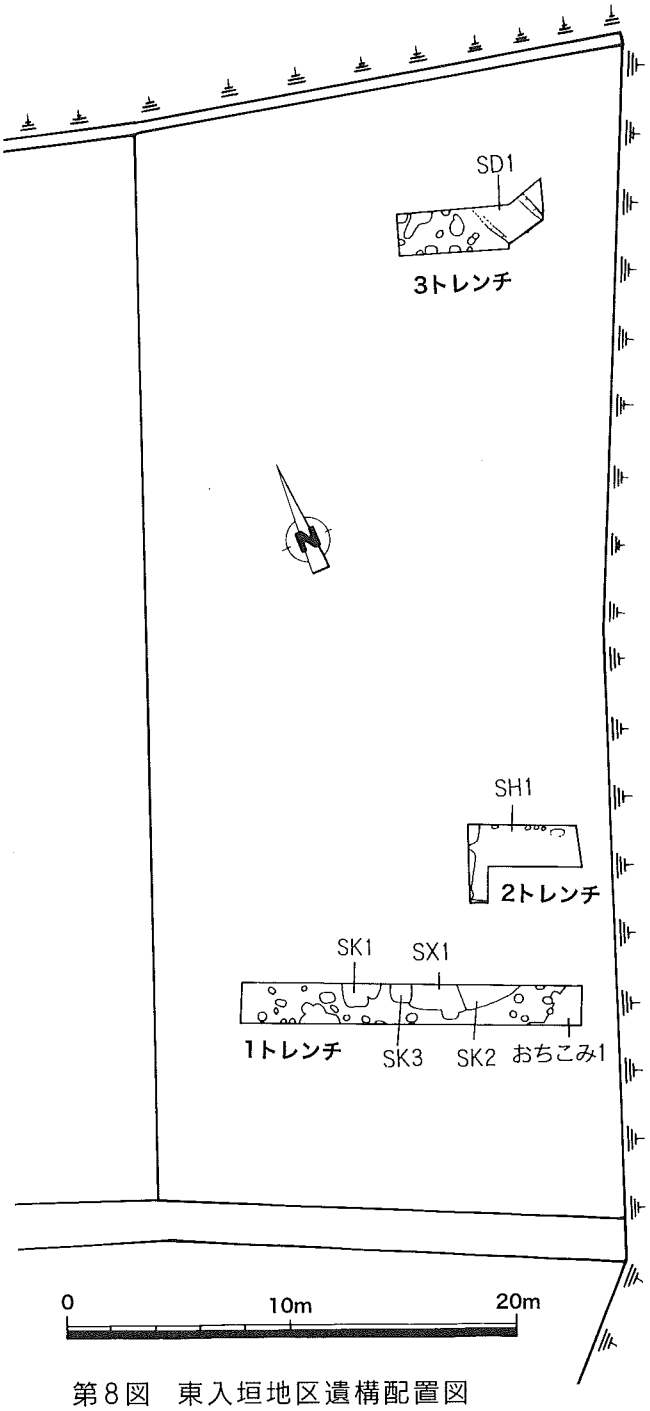


第７図　福島台地周辺地形図（Ｓ＝1/5000）

1．調査に至る経緯

当遺跡は、中津市福島に所在する標高２７ｍほどの台地上に立地する。この台地は福島遺跡として周知される。南北５００ｍ、東西２００ｍほどにおよぶ。台地の南側には２級河川、犬丸川が流れる。台地の表面では、黒曜石の剥片、弥生土器、土師器、須恵器などの土器片が散見できる。

昭和４８年この台地の東端で、採土作業中地下式横穴が発見され発掘調査されている。出土遺物がなく、造営年代は不明である。副葬品をもたない大規標な地下式横穴として貴重な報告となった。昭和５５年台地の西端、入垣貝塚の隣接地で宅地開発が持ち上がり発掘調査が行なわれた。調査区からは、縄文後期の住居跡、住居内土壙墓などが検出された。これらはすべて保存され大分県指定の史跡となった(字名より棒垣遺跡とした)。これらの経緯から昨年度より福島台地上の遺跡の範囲を知るために確認調査を行なうことになった。昨年度は台地の南端で調査を行なった。土壙墓一基、縄文～中世に至る土器片を多数検出できた。遺構も検出したが、掘り下げないことを前提としていたので性格は不明である。今年度、台地の北端で、市道三ノ丸線拡幅工事 に伴う調査を行なった。台地の落ちぎわで表土より５０ｃｍほど掘り下げて地山を確認した。遺構は検出されなかったが縄文～中世に至る土器片が数点出土した。そこで今年度の確認調査は台地の東側（字東入垣）で行なうことにした。なお、遺構が検出されたため、この調査区を福島遺跡東入垣地区と命名した。(花崎)



第８図　東入垣地区遺構配置図

2．調査の概要

今回の調査は、昭和４８年度に調査された遺跡の南側で行なった。現地は畑地で開発の予定がないが、前年度の調査で遺構の性格がまったく不明であったため遺構を検出できれば、一部掘り下げることにした。

すべてのトレンチで表土より約60ｃｍ掘り下げて遺構ラインを検出した。検出した遺構は、1トレンチから弥生時代の土壙一基、奈良～平安時代の土壙２基、時期不明のピット多数である。２トレンチからは古墳時代の住居跡を検出した。３トレンチは弥生時代の溝一条、時期不明のピット多数である。(花崎)

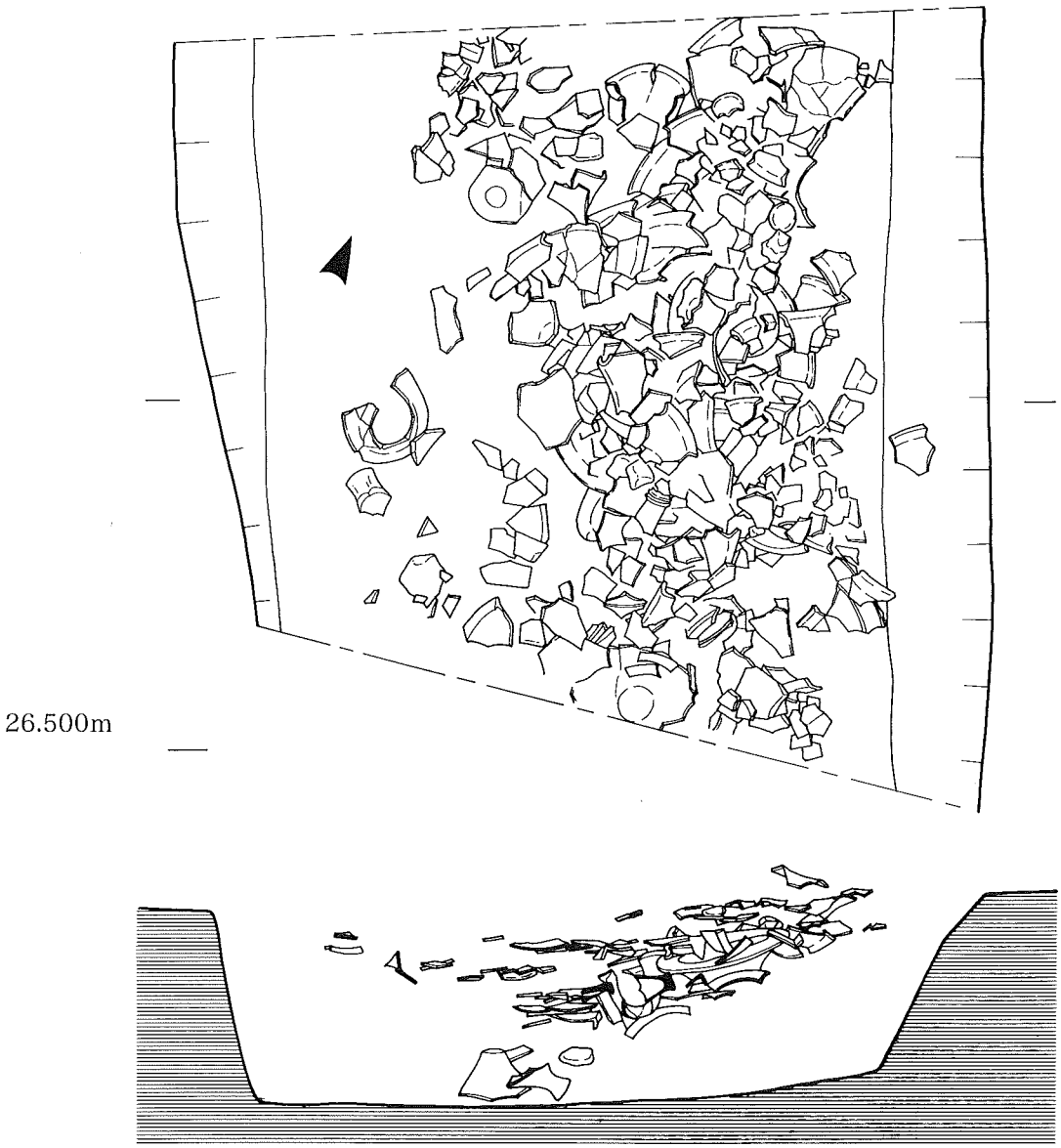
（1）弥生時代

調査区内の包含層から弥生土器、石器が検出された。３トレンチの第３層からは、石剣の未製品が一点出土した。また３トレンチの東隅に深い落ち込みがあったため調査区を拡張すると、溝（ＳＤ－１）が検出された。溝の幅は約２ｍ、深さ約50㎝で、断面は方形であった。溝は南北方向にのびており、やや粘質の暗褐色土とともに、大量の弥生土器が出土した。土器は全部でパンケース10箱あった。ばらばらに破砕されており、出土状態からみて、一括廃棄されたものと思われる。そのうち石器は、偏平打製石斧１点と磨製石斧１点のみであった。

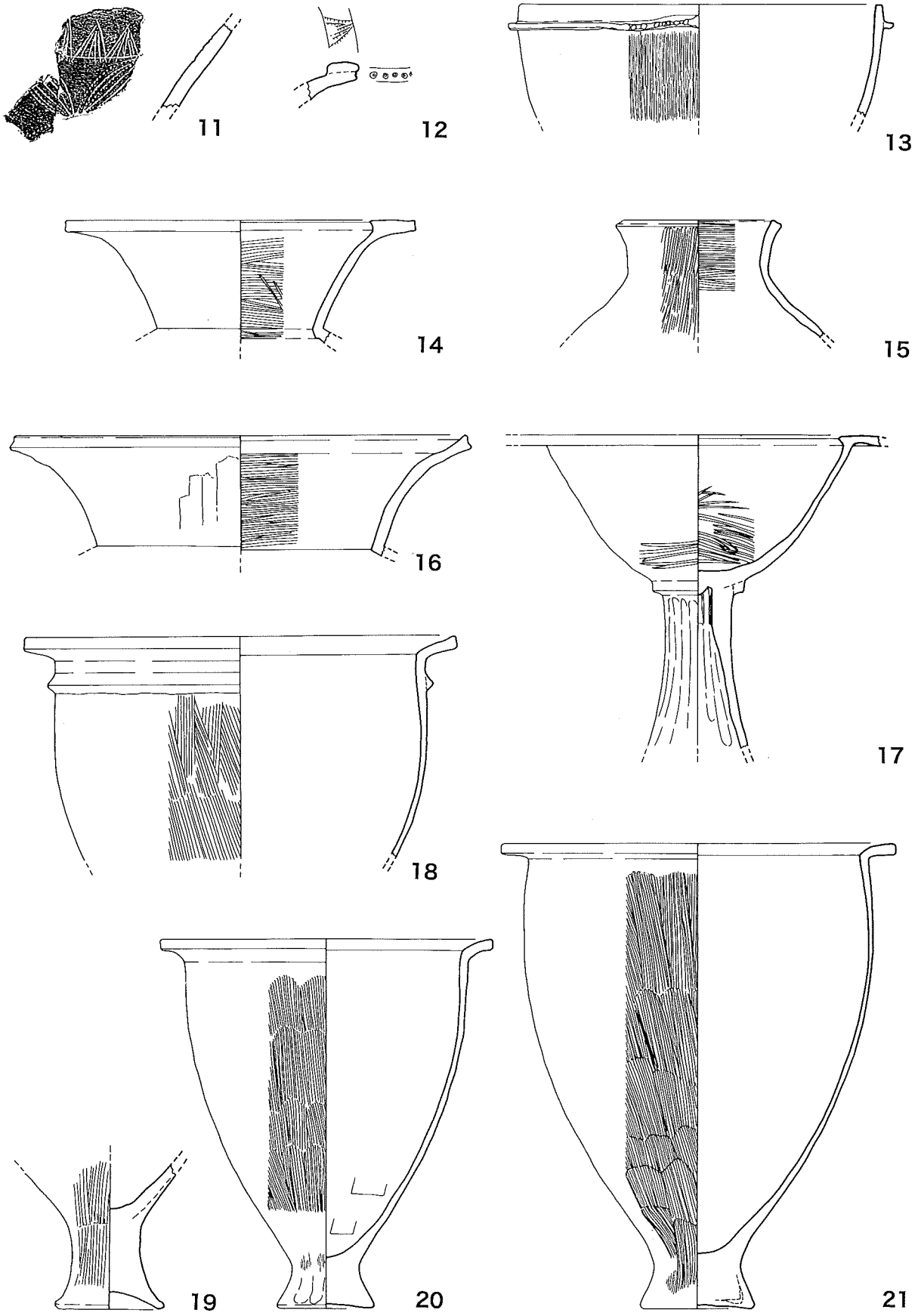
土器の器種構成は、甕、壺、高坏の３種類にしぼられ、なかでも甕が全体の約60％をしめる。甕は次の３タイプに分けられる。

①、口縁直下に刻み目突帯文を有すいわゆる下城式のもの（第10図13のタイプだが、この図は１トレンチの包含層出土のもの）。前期の特徴的な甕であるが、一部中期中葉まで残ることがしられている。

②、口縁部を「く」字、または「Ｌ」字に外反させ、内面に稜のつく城ノ越系のもので、胴部に突帯な



第９図　SD-1　平面断面図（S＝1/20）



第10図　東入垣地区出土遺物実測図１（S＝1/4）

どの装飾のないもの（20、21）。

③、②の口縁直下に一条の突帯をはりつけるもの(18)。いずれも外面をていねいなハケ目でしあげている。

①は１点、、③は２点のみで、他はすべて②で、鋤先状口縁や亀ノ甲のものはない。大型と中型がある。

壺は以下の４タイプに分類できる。

①、口縁部が素口縁で朝顔型に開くもの（16）。１点のみ。

②、口縁端部が肥厚するもの(12)。水平面に貝殻による山形紋、端部外周に竹管紋をめぐらす。一点のみ。胴部に木の葉紋を施すもの（11）もある。２点出土している。これらは、関門、西瀬戸の系譜で、中期初頭から前葉にみられる。

③、②の口縁部の発達形態とみられる、口縁の断面が鋤先状を呈するもの（14）。壺はこのタイプが主体で、大型と中型がある。胴部に２条の三角突帯を有す。

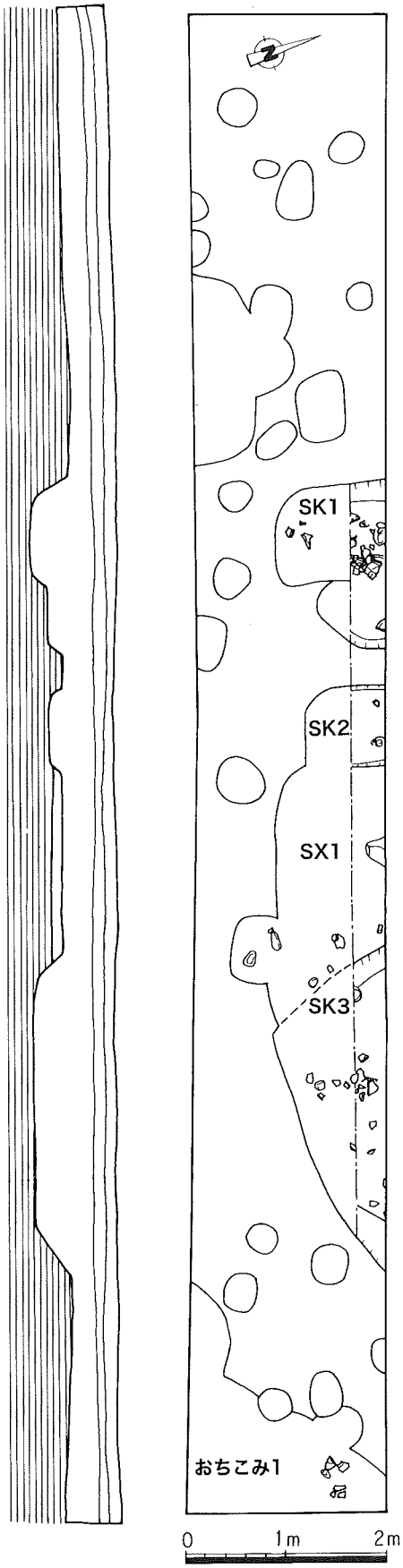
④、長頸壺（15）。内外面ともミガキを施し、ていねいにしあげている。１点のみ。

高坏は①、口縁部が鋤先状のもの（17）が主体で、口縁部の鋤先が未発達で、小型のものが１点ある。いずれも体部と脚部の境に一状の三角突帯を有す。

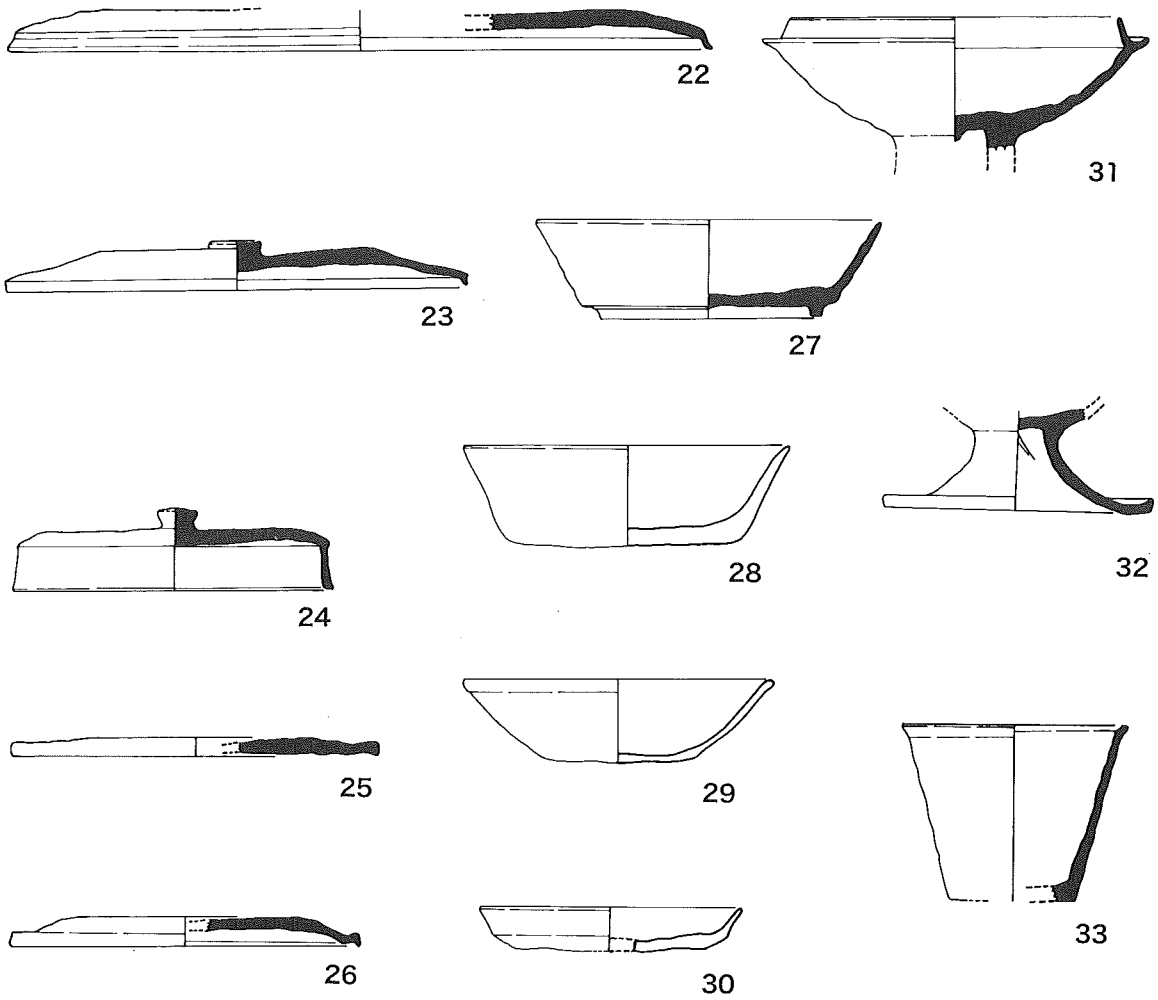
以上、出土土器をタイプ別に分類してみると、甕①や壺②など早い時期のものがまじるなど多少ばらつきがあるものの、基本的には甕②、壺③、高坏①の３種類のみという大変シンプルな構成になっている。同時期としては台ノ原Ⅱ式B、宮ノ原Ⅳ期があり、特に鋤先状口縁の壺と「L」字口縁の甕という組合せは宮ノ原に共通するもので、須玖１式が主体である。（高崎）

（3）古墳時代

遺構　古墳時代の遺構と思われるのは、２トレンチの住居跡である。表土より３層掘り下げた面で遺構を検出した。１層は現代耕作土の褐色土層である。２層はやや砂質の黄褐色土層である。３層は粘質の黒褐色土層で、土器片が出土している。遺構全面のプランが不明だったため南側を拡張して遺構ラインを追ったところ、遺構の南隅のコーナー部を検出した。住居跡全体を確認するに至らなかったが方形プランの住居跡と考えられる。またトレンチ北側を３０cm幅のサブトレンチを掘り下げた。２０cmほど掘り下げ地山を検出し



第11図　１トレンチ平面図



第12図　東入垣地区出土遺物実測図２（S＝1/3）

た。地山はトレンチ東側までほぼフラットであった。この住居に直接伴うピットを４つ検出したが主柱穴であるかは不明である。住居内西側で焼土及び黄白色土の粘土を確認した。この住居跡に伴うカマド状の遺構と思われる。

遺物　サブトレンチからは検出できなかったが遺構面上層より遺物が出土している。この住居に伴うものかは定かではない。３１は有蓋の高坏である。外面を回転なで調整、内面を回転なで調整後に多方向への指なで調整を施す。(花崎)

(3) 奈良、平安時代

遺構　奈良、平安時代の遺構はＳＫ２・ＳＫ３・ＳＸ１を検出した。遺構ラインは、２トレンチと同じく３層掘り下げて検出した。またトレンチの北側で50 cm幅のサブトレンチを掘り下げた。

ＳＫ２はトレンチの中央に位置する。遺構検出面より15 cm掘り下げて底を検出した。検出した土壙の東西の幅は５０ cmを測る。ＳＫ３はトレンチの東側に位置し、遺構検出面より30 cmほど掘り下げて底を確認した。遺構検出当初は、方形の竪穴住居と思われたが、鈍角に掘り込まれていることから住居跡とは考えにくい。ＳＸ１はＳＫ２とＳＫ３の間に位置する。東側をＳＫ３に西側をＳＫ２に切られており、両遺構より時代が古いものである。遺構検出面より10 cm掘り下げて底を確認した。検出面はフラットであった。

遺物　22～26は須恵器の蓋である。22はＳＫ３より出土したものである。復元口径28 cmを側る。天井部に回転ヘラ削り後になで調整を施す。23は、天井部から屈曲して口縁部にいたり、端部は断面逆三角形を呈す。24はＳＫ３より出土しており、平坦な天井部から口縁部は屈曲して垂下する。短頸壺のフタになると思われる。器高3.3 cmを測る。25は器高が低く平坦である。26は、口縁端部はくちばし状に湾曲する。８世紀中葉のものと思われる。27～30は坏である。27は須恵器の坏で８世紀中葉のものと思われる。28～30は土師器である。28は口縁部にややふくらみをもち外反する。29はＳＫ２のほぼ底より出土した。底部をヘラ切り後になで調整を施している。９世紀後半のものと思われる。30はＳＫ３上層から出土したものである。復元口径10.5 cmを測る。10世紀後半のものと思われる。32は、短脚の高坏の脚である。33は須恵器のコップ状になると思われる。復元口径13 cmである。（花崎）

（4）まとめ

これまでの調査では、福島台地の西端で縄文時代の遺構（住居跡や墓、貝塚）が濃密に分布しているのが確認されている。しかし、台地の東端になる今回の調査区では、縄文時代の遺構、遺物とも検出されなかった。一方、弥生時代中期の溝の発見は大きな成果であった。溝は台地の東端を南北方向にはしっている。環壕になるかどうかわからないが、溝の東南の畑は近年削平されており、溝が残存している可能性は少ない。今後は主に北側に溝の続きを探す必要があろう。西側では以前弥生時代の住居跡が確認されており、台地全体に弥生の集落が広がると思われる。1993年に本年度調査区の約350 m北側で、弥生時代中期の二列埋葬の群集墓とそれにともなう溝が発掘された（福島遺跡）。溝には大量の土器が廃棄されており、今回のものとほぼ同時期である。透かしのはいったものや何条も突帯をめぐらすものなど装飾性が高く、丹塗土器も多数あり、祭祀的性格が強い。二つの遺跡が集落とその墓域としてセット関係になるかどうかこれからの課題である。また今回、奈良、平安時代の遺物を多数採取することができ、古代の遺跡の密度の濃さを再認識させられた。台地の西側、東側とも厚い遺物包含層があり、ある時期おおがかりな整地がおこなわれたものと思われる。遺構の性格はわからなかったが、今後、福島台地の、縄文時代からはじまる遺構の推移を考えていく上で貴重な資料となった。（高崎）

［参考文献］

村上　久和『ボウガキ遺跡』三保の文化財を守る会、中津市教育委員会 1992

渋谷　忠章『福島地下式横穴』1974

宮内　克己「出土土器の編年」『弥勒寺』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1989

坂本　嘉弘『安心院宮ノ原遺跡』安心院町教育委員会 1984

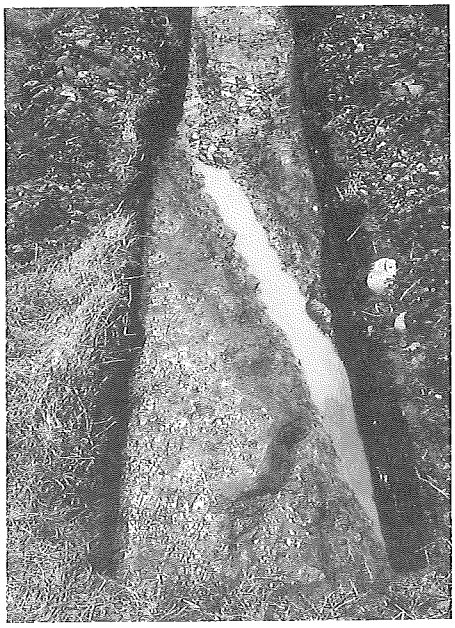
後藤　宗俊 ほか『台ノ原遺跡』大分県教育委員会 1975

佐藤　浩司「奈良時代の須恵器と土師器ー旧豊前国を中心としてー」『東アジアの考古と歴史』1987

五十川孝正『上万田遺跡（２）』大分県教育委員会 1995

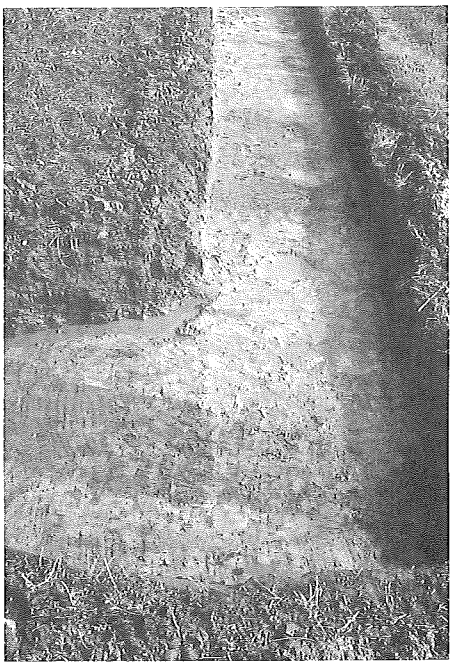
図版1　沖代地区条里跡

小倉地区遺構検出状況

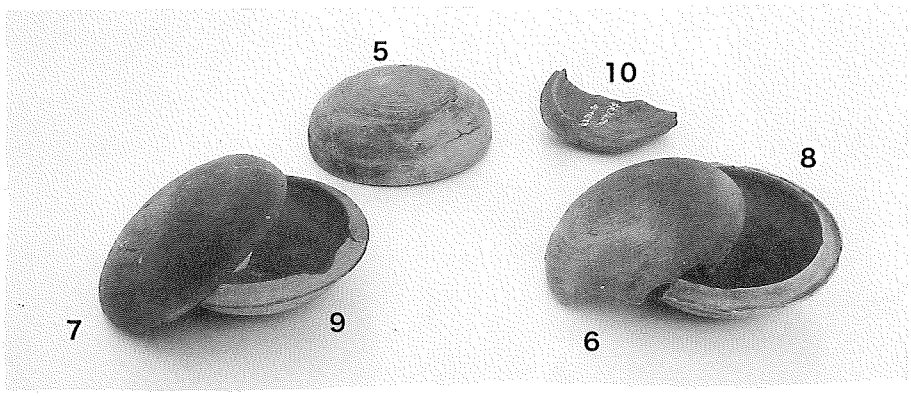


市木地区
SD-1
検出状況

市木地区発掘風景



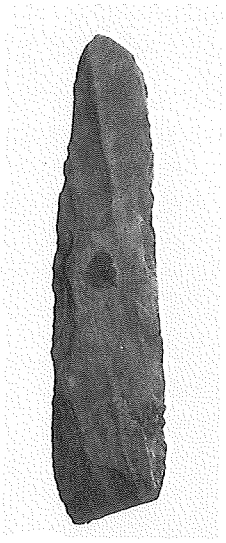
市木地区 SD-5、SD-6 検出状況



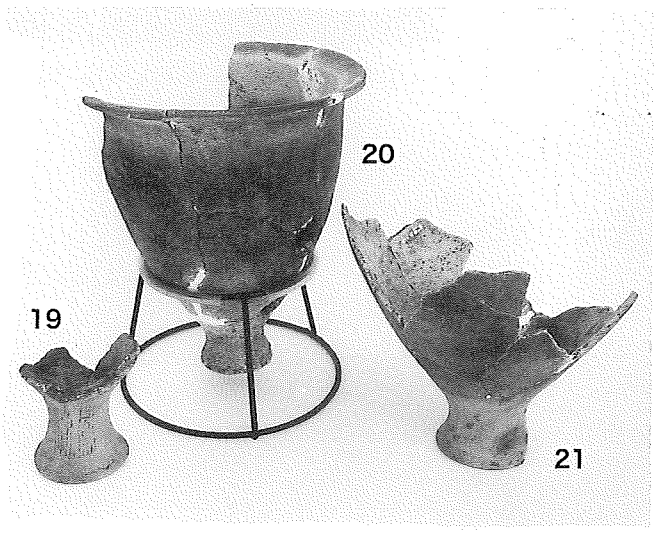
市木地区出土遺物

図版2　福島遺跡東入垣地区

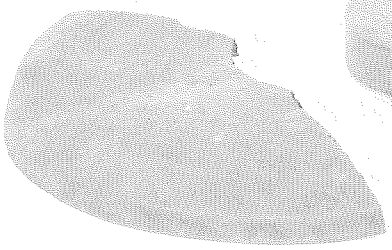
SD1　遺物出土状況

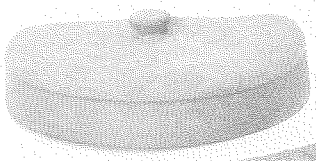


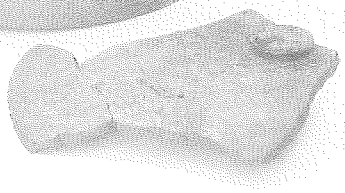
石剣未整品



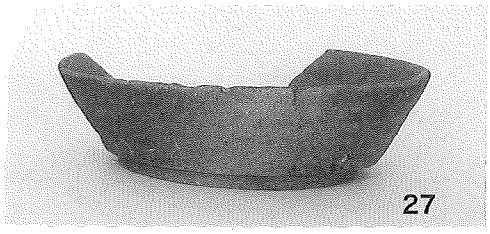
図版3　福島遺跡東入垣地区


22

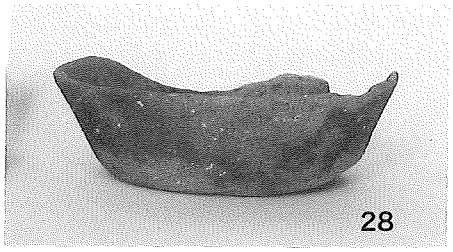

24

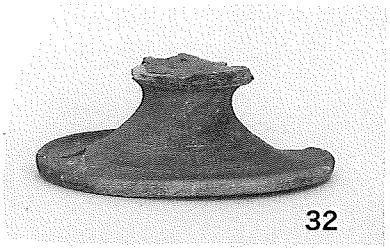

23

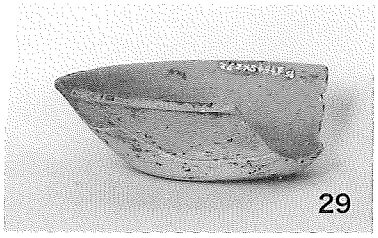
33

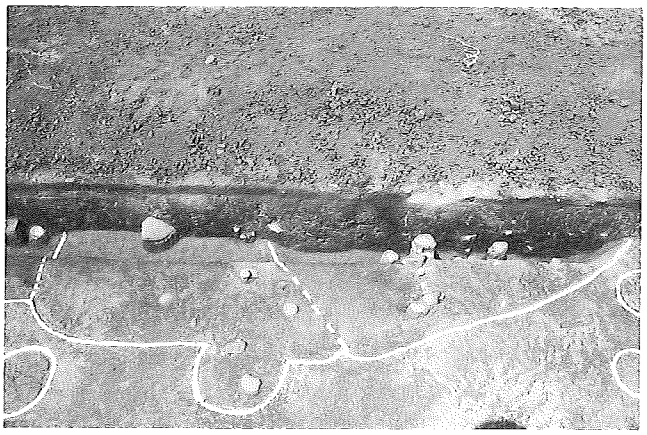

27

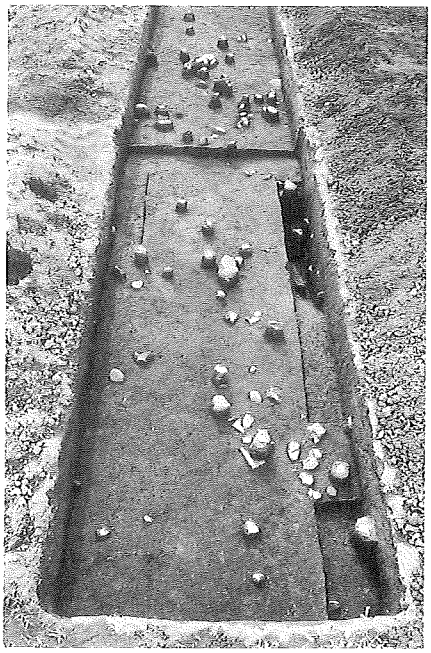
31


28


32


29


SX１、SK３　検出状況


１トレンチ

報告書抄録

ふりがな	おきだいちくじょうりあと　ふくしまいせきひがしにゅうがきちく
書名	沖代地区条里跡　福島遺跡東入垣地区
副書名	1995年度中津地区遺跡群発掘調査概報（Ⅷ）
巻次	
シリーズ名	中津市文化財調査報告
シリーズ番号	第17集
編著者名	高崎章子　花崎　徹
編集機関	中津市教育委員会
所在地	大分県中津市豊田町14—3
発行年月日	1996年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
沖代地区条里跡（おきだいちくじょうりあと） 小倉地区	大分県中津市 中央町1-813-1	44203	101007			19950601 ～19960331	945m²	体育館 建設
高田地区	大分県中津市 大字万田624他					19950420 ～0720	3,605m²	宅地造成
市木地区	大分県中津市 大字永添214他					19950601 ～0901	6,925m²	宅地造成
福島遺跡（ふくしまいせき） 東入垣地区（ひがしにゅうがきちく）	大分県中津市 大字福島1330	44203	101051			19950619 ～0930	1,000m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
沖代地区条里跡（おきだいちくじょうりあと） 小倉地区 高田地区 市木地区	水田	古墳時代	水路	須恵器の坏、甕	
福島遺跡（ふくしまいせき） 東入垣地区（ひがしにゅうがきちく）	集落	弥生～奈良		弥生土器 須恵器 土師器	弥生中期の溝

沖代地区条里跡
福島遺跡東入垣地区

1995年度 中津地区遺跡発掘調査概報(VIII)
中津市文化財調査報告　第17集

1996年3月31日

発行　中津市教育委員会
印刷　(株)川原田印刷社